

【巡回指導教員と在籍校教員の連携】

事例No. 3

特別支援教室専門員の活用による巡回指導教員と在籍校教員の連携（北区の取組）

（１）基本情報(平成29年9月1日現在)

特別支援教室利用児童数	462名
巡回指導教員数	45名
拠点校数	7校
巡回校数	35校

（２）取組のポイント

各校の特別支援教育コーディネーターと特別支援教室専門員の連携についての実態把握

「学校生活支援シート」及び「個別指導計画」の効果的な活用

連携型個別指導計画の導入に向けて

（３）実際の取組

巡回指導教員と在籍校教員の連携（特別支援教室専門員の活用）を図るために以下のような取組を進めている。

① 特別支援教育コーディネーターと専門員の連携についての実態把握

巡回指導教員と在籍校教員が連携を図るためには、校内委員会のまとめ役である各学校の特別支援教育コーディネーターが中心的な役割を担うことになる。日々巡回校を回っている巡回指導教員と特別支援教育コーディネーターが限られた時間の中で効率的に連携していくためには、調整役を担っている特別支援教室専門員がその間に入って連携を図ることとなる。具体的には、特別支援教育コーディネーターから提供された児童の個別指導計画を巡回指導教員に伝えたり、巡回指導での児童の学習の記録を整理して、特別支援教育コーディネーターに報告する等している。特別支援教育コーディネーターを対象に行ったアンケート調査では、この点において、「特別支援教室専門員と連携している」と回答した特別支援教育コーディネーターは89%との結果が出た。

②「学校生活支援シート」及び「個別指導計画」の効果的な活用

「学校生活支援シート」及び「個別指導計画」においては、どのように指導目標を設定するか、保護者の願いをどのように反映するか、上級学校への引継ぎを確実にしているか等において課題があるが、特に「アセスメントに基づく指導目標の設定」について早急に改善を図る必要があると考えた。

改善に向けた取組として、今年度、巡回指導教員対象の専門研修会及び特別支援教育コーディネーター研修会において「アセスメントに基づく指導目標の設定と指導体制の構築」のテーマで研修を行った。学校生活支援シート及び個別指導計画に記載する児童生徒の長期目標と短期目標について、心理検査等の客観的な根拠資料と行動観察のデータを基に適切に設定する方法について学ぶ機会を設けた。これによりアセスメントに基づく児童生徒の指導目標の設定について、教職員が「具体的な評価ができる指導目標の設定」に意識を持って取り組むことができるようになった。

③連携型個別指導計画の導入に向けて

児童生徒にとって効果的な指導を行うことができるようにするツールとして「連携型個別指導計画」を区全体で導入するために検討を進めている。今年度、巡回拠点及び言語障害難聴通級指導学級の主任連絡会において、連携型個別指導計画の内容についてや在籍校での活用方法について検討を進めている。

平成30年度より順次導入を図り、平成32年度には小学校全校において、平成33年度には中学校全校において、全ての巡回指導対象児童生徒について連携型個別指導計画の作成を行う予定である。

(4) 取組の成果と今後の展開

各校の特別支援教室（巡回指導）を充実させていくためには、特別支援教育コーディネーターを中心とした各校の校内委員会の機能を確実に果たす必要がある。巡回指導教員のアンケートからは、校内委員会は、少しずつ前に進んでいると評価している者が多い。これは各校の専門員が、校内委員会資料用の記録の作成等に大きな役割を果たしていることが考えられる。校内委員会が、特別支援教室における巡回指導につなげることを目的とするのではなく、児童にとって一番適切な支援は何か、在籍学級の中でどのように個別の支援を図っていくかを検討できるようにしていくことが課題である。今後は各校で専門員を効果的に活用できるように、特別支援教育コーディネーター研修会等で、専門員の各校の取組の実践紹介を行っていくことを検討していく。

学校生活支援シートと連携型個別指導計画において、児童の具体的な目標を設定することは、課題が明確になり、特別支援教室の利用終了（退級）にもつながることと考える。そのためには、学校に配置されている専門員の機能を活用し、在籍校担任と巡回指導教員がアセスメントに基づいた目標設定を行うことができるようにしていくことが必要である。目標設定に関する研修会を今後も開催していく。また、学校生活支援シートや連携型個別指導計画の目標を達成するためには、巡回指導教員の授業力の向上を図っていくことが必要である。そのために、巡回指導教員の研修についても充実を図っていく。

【巡回指導教員と在籍校教員の連携】

事例No. 4

巡回指導教員と在籍校教員との連携（目黒区の実践）

（1）基本情報(平成29年9月1日現在)

特別支援教室利用児童数	273名
巡回指導教員数	27名
拠点校数	7校
巡回校数	15校

（2）取組のポイント

個別指導計画の工夫
連絡帳の利用
在籍学級における巡回指導教員同席の面談の実施

（3）実際の取組

- 平成25年度当初の特別支援教室における拠点校の設置に当たっては、巡回校から歩いて15分程度の距離にある3～4校を1ブロックとして、これまでの情緒障害等通級指導学級設置校4校に加え、特別支援学級設置校を除く小学校の中で新たに3校を指定し、7校の拠点校を設置した。22校中7校を拠点校とすることで、拠点校1校に対し2～3校を巡回する体制を整えた。
- 全ての特別支援教室で同じ基準で指導計画を作成できるようにするため、平成26年度中に検討を重ね、それまで様式が拠点校によって異なっていた個別指導計画の様式を、平成27年度当初から特別支援教室共通の様式に変更した。内容は、通常の学級の担任や保護者が理解しやすいような項目や表現を使用した（別紙1）。
- 特別支援教室における指導があった日は、指導内容の共有化を図るため、放課後に巡回指導教員と在籍学級担任が口頭で打合せを行っている。さらに、学級担任に連絡の上、通常の学級での支援のために配置している特別支援教育支援員（区有償ボランティア）と巡回指導教員が昼休みなどに打合せを行い、一人一人の教育的ニーズに応じた板書の写し方や記録の取り方など、通常の学級での個別の支援に生かしている。また、拠点校によっては、巡回指導教員、保護者、在籍学級担任の三者での連絡帳のやり取りを行っている場合もある（別紙2-1）。さらに、拠点校によっては、児童に渡した連絡帳の写しを在籍学級担任に渡して情報の共有化を図っている例もある（別紙2-2）。

- 巡回指導教員は、毎年5～6月頃には、個別指導計画の内容の共有化を図るため、学級担任、保護者との三者面談を在籍学級で実施している。また、指導時数の変更や退級に向けての打合せが必要な場合は、その都度、三者面談を実施している。
- 巡回指導教員は、週ごとの指導計画を拠点校校長のほかに巡回校校長にも提出し、週ごとの指導状況について、在籍校校長が把握できるようにした（別紙3）。
- 巡回指導教員は、巡回校での指導がない時間帯や、巡回校での時間割変更のため特別支援教室での指導がなくなった時間帯は、特別支援教育コーディネーター（副担当）として巡回校からの相談に乗り、特別支援教室の利用が見込まれる児童の行動観察を行っている。
- 巡回指導教員は、在籍校と協力して、特別支援教室での授業を体験させたり、発達障害の理解授業を行うなどして、なるべく低学年からの児童の理解啓発に努めた。
- 巡回指導教員が巡回校の校内研修の講師となり、教職員を対象とした理解啓発研修を行った。
- P T Aだよりや学校だよりの中で、特別支援教室や巡回指導教員の紹介記事を掲載し、保護者向けの理解啓発を行った。

（4）取組の成果と今後の展開

巡回指導教員と在籍学級担任が連携することで、通常の学級での指導の進捗状況に合わせて特別支援教室での指導内容を変更したり、児童の困難さに注目して在籍学級で支援をすることができるようになった。例えば、在籍学級で前日にあったことを基にして特別支援教室のソーシャルスキルトレーニングの授業を組み立てたり、自立活動の中で、今後行われる予定の学習内容を取扱い、その結果を在籍学級担任に伝え、在籍学級で授業内容を工夫するなどの連携を行うことができるようになった。特別支援教室と通常の学級での指導内容がつながりを持つことで、特別支援教室に行くことを不安に思う児童も、安心して特別支援教室に来ることができるようになった。

また、巡回指導教員の助言により在籍学級の教室内の掲示物の整理を行ったり、ソーシャルスキルトレーニングで使用する「聞く時間」「話す時間」等の表示をした絵カードを在籍学級担任に渡して、授業内容の構造化を図るなどの工夫に生かせるようになった。

巡回校での理解啓発を継続して行うことで、児童・教職員・保護者の理解が深まり、支援につながりやすくなった。これまで気付かなかった学習障害等の児童の特性について、早期に気付くことができるようになり、特別支援教室での指導につなげることができるようになった。その結果、特別支援教室の利用児童数は、平成24年度の77名から、平成29年9月1日現在ではおよそ4倍の273名まで増加した。なお、毎年12月には特別支援教室を利用している児童全員について指導の振り返りを行い、次年度に向けて指導の延長・終了を在籍校の校内委員会で検討しているが、特別支援教室の利用承認の際に、指導期間が原則として1年間であることや、退級を見据えた指導期間・指導時数について、あらかじめ保護者や児童に提示していく必要がある。適時適切に指導の開始・終了を図ることで、支援が必要な児童が、支援が必要なときに支援を受けられる体制を構築していく。

平成30年度 特別支援教室個別指導計画（前期・後期）

フリガナ			性別	学年・組	
氏名					
在籍学校			校長名		
			担任名		
作成者	拠点校名（ ）学校	指導時間	拠点校指導日	曜日・週	時間
	担当巡回指導教員（ ）		在籍校指導日	曜日・週	時間
支援員の配置	有・無 週 ～ 時間	支援員配置理由	安全確保・身辺自立支援・授業参加支援 ・コミュニケーション支援・その他		

本人・保護者・担任の願い

本人	
保護者	
担任	

【得意なこと・好きなこと】

--

【長期目標 生活面・学習面】

--

◇ 前期・後期の目標（短期目標）

	実 態	目 標	支援方法・手だて
学 習 面			
生 活 ・ 行 動 面			
対 人 関 係 ・ そ の 他			

◎ 次の学校への引継ぎについて（進学・転出の際に、学校間の引継ぎについて保護者の意思を確認してください）

以上の内容の引継ぎをする。 以上の内容の引継ぎはしない。

特別支援教室児童在籍校長 印	特別支援教室拠点校巡回指導教員 印	保護者氏名 印
-------------------	----------------------	------------

◇ 前期・後期の評価

目 標		評 価
学 習 面		
生 活 ・ 行 動 面		
対 人 関 係 ・ そ の 他		

後期（次年度）に向けて

--

在籍学級担任・保護者用

月 日 () 時間目	
特別支援教室「〇〇〇」: (巡回指導教員氏名)	
指導の記録	
その他連絡等	在籍学級担任サイン
家庭より	

月 日 () 時間目	
特別支援教室「〇〇〇」: (巡回指導教員氏名)	
指導の記録	
その他連絡等	在籍学級担任サイン
家庭より	

平成29年度 通室連絡帳

名前 目黒 花子

12月 1日 木曜日

課題	科目	内容・様子
I	個別	
II	運動	ボール運動
III	制作	アイロンビーズ
IV	こと コミ	すずかけ学級会
V	生活 スキル	せんたく名人 (たため方)

ご家庭からの連絡 (必要があればお書き下さい。)

特別支援教室()からの連絡

次回指導日 月 日()

指導計画案7月11日～7月15日

別紙3

日	月	火	水	木	金
	11	12	13	14	15
勤務	拠点校	AM巡回校A PM拠点校	拠点校(1校時巡回校A)	巡回校A	拠点校
予定	特別支援事業実施委員会 14:30～教育委員会室 ※常任委員会委員視察	前期前半指導終了	拠点校1年1,3,4組理解教育 ※児童発達支援センター職員来校	巡回校A 1年1・2組理解教育	保護者学習会 拠点校1年2組理解教育
1	拠点校特別支援教室職員会議 ※保護者学習会について	〇〇(2年)個別 ・簡単な言葉のやりとりができるようにする 「いろいろすくろく」 ①お休みの時のこと②電子オルガン ③マジカルバナナ(動詞) ④絵カード(コミュニケーション)⑤トマト	拠点校・理解教育(学習室・プレイ ルーム) 1年4組 T1教員A	児童観察(3年K) 理解教育事前準備	
2	〇〇(2年)個別 ・自分の長所を活動に生かして取り組む ・よい姿勢を保ちながら集中して学習する ①スピード②オリジナルフونت③2けた 繰り上がり計算UFOキャッチャー④小集 団振り返り	〇〇・△△(3年)小集団T1教員B ・気持ちをコントロールし、楽しく時間を 過ごせるようにする ※出前授業のため休室	理解教育(学習室・プレイルーム) 1年1組 T1教員B 児童発達支援センター職員来校(10: 00～11:30) ランチルーム	理解教育(スタディルーム・ラン チルーム) 1年1組	特別支援教室拠点校合同保護者学 習会 9:30～11:45 「ご家庭でもできる体の動かし方に 関する指導法」 講師:学識経験者(心理)
3	〇〇(2年)、△△(3年)、□□(3年)、× ×(4年)※中学年プール時は欠席 ・気持ちをコントロールし、楽しく時間を過 こせるようにするT1教員A、教員C ①外国語仲間集めゲーム※視察	〇〇(3年)個別※出前授業のため休室 ・自分の長所を活動に生かして取り組む ・ルールを守って学習する	児童支援 観察	理解教育(スタディルーム・ラン チルーム) 1年2組	
4	〇〇(1年)個別 ・自信をもって活動に取り組むことが出来る ①手品作り②お別れパーティー ※飾り付け	〇〇(1年)個別※プール時は休室 ・自分の思いを適切な言葉で表現すること ができるようにする ①オリジナルフونت ②もじびったん ③スピード④SSSTUFOキャッチャー	理解教育(学習室・プレイルーム) 1年3組 T1教員A	理解教育(スタディルーム・ラン チルーム) 1年2組	
5	〇〇(4年)個別 ・自分の長所を活動に生かして取り組む ・よい姿勢を保ちながら集中して学習する ①オリジナルフونت②1年生の漢字ま ちがいさがし③トランポリンジャンプ (④ブロックス)	〇〇(3年)個別 ・自分の長所を活動に生かして取り組む ・よい姿勢を保ちながら集中して学習する ①キーボード練習②オリジナルフونت③ ドッジボールターゲット④トマト	※巡回校Aへ理解教育関係を運ぶ ※トマト準備	※スタディルーム便り作成	理解教育(学習室・プレイルーム) 1年2組 T1教員B
6			※拠点校保護者学習会準備	支援会議 15:30～低・3年 ～6年	

* 夏休み前の週の週のため、特別な時間割が混在しています。

* 内容は平成28年度のものです。

事例No. 5

在籍校担任と巡回指導教員で進める、児童のアセスメントと読みの困難さの改善（目黒区の実践）

（1）基本情報

※P12（1）のとおり

（2）取組のポイント

通常の学級において、巡回指導教員が在籍学級担任と協力して月1回のアセスメントテストと理解啓発授業において特殊音節に関する指導を実施。

1学年全員を対象とした給食配膳中の巡回指導教員による取り出し指導の実施。多層指導モデルMIMにおける2ndステージ、3rdステージの児童に対しては、複数回実施。

3rdステージの児童には、取り出し指導の際に準備テストや様々な教材を用いて巡回指導教員が指導する。

（3）実際の取組

① 多層指導モデルMIMとは

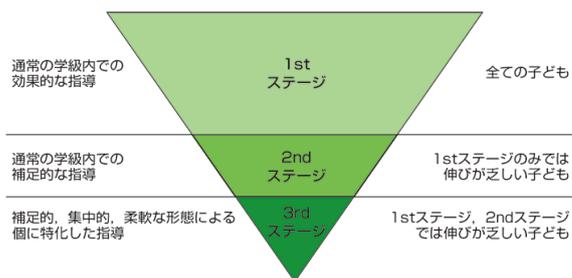
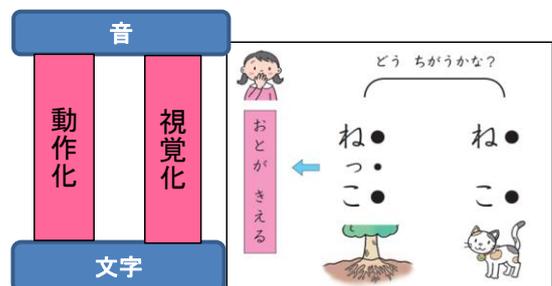


図1 通常の学級における多層指導モデルMIM(Multilayer Instruction Model)

MIMを使って学ぶ意義
特殊音節をルールとして、多感覚で捉えられるようにする



②-1 通常の学級で在籍学級担任が

MIMアセスメントテストを行う。



②-2 巡回指導教員が理解教育授業を行う。



③ 1年生全員に対し巡回指導教員が取り出し指導及びアセスメントを行い、その後2nd・3rdステージの児童に対し指導を行う。



④ 3rdステージの児童に対し、巡回指導教員が取り出し指導を行う。



給食前の時間や、特別支援教室での学習に使用

④ 通常の学級内での取組から、3rdステージの児童までの取組を続けた結果、3rdステージの児童は、3ヶ月で半分以下に改善された。

氏名	テスト総合点	テスト① 正答数	テスト② 正答数	前回との比較
	4	4	0	4
	10	6	4	10
	13	8	5	13
	19	13	6	19
	8	8	0	8
	12	9	3	12
	21	11	10	21
	14	8	5	14
				0
				10
				12
				12
				13
				15
				15
	19	10	5	19
	12	5	3	12
	6	5	1	6
	12	11	1	12
	7	1	0	7
	9	4	4	9
	22	14	8	22
	16	10	6	16
平均	11.6	7.8	3.8	11.6

7月クラス平均点
11.6点

3rdステージ赤: 13名
2ndステージ黄: 8名
1stステージ白: 6名

氏名	テスト総合点	テスト① 正答数	テスト② 正答数	前回との比較
	19	9	6	6
	21	12	9	9
	10	7	2	-1
	25	19	6	8
	24	16	8	4
	11	8	3	4
	27	17	10	4
				15
				4
				11
				4
				5
				5
				4
				-2
				6
				7
				4
				9
				-1
	18	13	5	5
	13	7	6	9
	25	15	10	3
	13	9	4	8
	19	11	8	7
	28	17	9	2
	欠席			
平均	18.9	12.0	6.9	5.0

10月クラス平均点
18.9点

3rdステージ赤: 5名
2ndステージ黄: 9名
1stステージ白: 12名
(欠席1名)

(4) 取組の成果と今後の展開

目黒区では、巡回指導教員は巡回校の特別支援教育コーディネーター（副担当）の役割を担っている。今回の事例の場合、通常の学級の担任と巡回指導教員が協力して、1年生児童全員のアセスメントを進めることにより、特別支援教室を利用している児童も利用していない児童も含め、読みの課題を抱える児童の早期発見を行うことができた。また、課題の多い児童に対しては、巡回指導教員が個別にアセスメントと指導を行うことにより、通常の学級の中で、早期の課題解決を図ることができた。さらに指導が必要な児童については、保護者との面談を通じて特別支援教室の利用につなげ、巡回指導教員と在籍学級の担任との連携を図り、MIMを活用した指導を行った。

通常の学級の中で早期に課題を発見することによって、特別支援教室を利用する前に、当該児童の課題を解決することにつながった。また、通常の学級における特別な支援が必要な児童への支援の幅を広げることになり、巡回指導教員との連携の中で、在籍学級担任が特別支援教育の視点を持つことにもつながった。

今回の事例を、区の特別支援教育コーディネーター連絡会において在籍学級担任と巡回指導教員が発表して共有を図ったが、今後は、ほかの小学校においても実践を広げていきたい。